SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

みかんの丘

2013年・エストニア、ジョージア合作映画
配給／ハーク・87分

2016（平成28）年10月22日鑑賞　テアトル梅田

Data

監督・脚本：ザザ・ウルシャゼ
出演：レムビット・ウルフサク／エルモ・ニュガネン／ギオルギ・ナカシゼ／ミヘイル・メスヒ／ライヴォ・トラス

みどころ

コーカサスの国グルジア（ジョージア）って一体どこに？日本人には全く馴染みのないそんな国にも、こんなスリリングな物語が・・・。

私の故郷である松山市もみかんの産地だが、２人の老人は戦火の中、なぜみかんの丘に残ったの？傷ついた敵、味方の兵士を看病したことから生まれてくる、憎悪と対立を経た赦しの物語とは？そして、銃撃戦（？）の結末は・・・？

島国日本人も、こんな映画から国際感覚を養わなくては・・・。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■コーカサスの国とは？アブハジアとは？■□■

「コーカサスの国グルジア（ジョージア）で起きた紛争を背景に、戦火が拡がる今日、人間として在るべき姿を示した傑作。人間と戦争の真実を描いた感動の２作品を一挙公開！」。チラシにはそう書いてあるが、そもそも、コーカサスの国グルジア（ジョージア）はどこにあるの？そして、それはどんな国？

パンフレットはそれについて詳しく説明してあり、ストーリーも書いている。それによれば、ジョージア（グルジア）と、ジョージアからの独立を主張するアブハジアは１９９２年以降激しい戦争状態にあったらしい。２００８年にはロシアがグルジアに侵攻したことによって南オセアチア紛争（別名ロシア・グルジア戦争）が注目されたが、ジョージアｖｓアブハジア紛争は日本人にとっては遥か遠い国の全然知らない出来事。そんな前提は仕方ないが、とりあえずネット上で、アブハジアとは？アブハジア紛争とは？を調べた上で本作を鑑賞したい。

■□■なぜ２人はみかんの集落に残ったの？■□■

私の故郷の松山市はみかんの産地だから、子供の時はよくみかんを食べていた。本作は『みかんの丘』というタイトルのとおり、アブハジアでの戦争が激化したためエストニア人の集落から多くの人々が帰国したが、イヴォ（レムビット・ウルフサク）とマルゴス（エルモ・ニュガネン）の２人だけはみかん栽培の集落に残っていた。と言っても、みかんを栽培しているのはマルゴスで、イヴォはみかんの木箱作りの職人だ。そこに、ある日アブハジアを支援するチェチェン兵であるアハメド（ギオルギ・ナカシゼ）ら数名が食料を求めてやってきたところから本作のストーリーが始まっていく。

パンを与えて見送ったとたんにアハメドたちはジョージアの兵から攻撃され、アハメドたちもジョージア兵たちも全員死亡・・・。そう思ったが、アハメドとジョージア兵のニカ（ミヘイル・メスヒ）の２人だけは命をとりとめたため、イヴォはマルゴスと共にこの２人を自宅に運び込んで治療することになるが、それは一体なぜ？放っておけばどうせ死んでしまうのだから、放っておけばいいのでは？いやいや、人間ならそうはできないはず・・・？

■□■味方の兵も敵の兵も分け隔てなく看病したが・・・■□■

傷はアハメドの方が軽く、ニカは重傷だったから、イヴォの家の中で対立し合う２人がホントに対決すればきっとアハメドの勝ち。しかし、顔を合わせれば口論を始める２人に対して、イヴォは「家の中では戦わせない」と厳命。２人ともイヴォに世話になっているのだから、イヴォの指示に従うのが礼儀だが、そういう発想はどちらかというと日本的で、「家主が力を持つ」のがコーカサス式のしきたりらしい。

それなら、家の外に出れば対決できるの？そんな考え方も成り立つところ、ある日屋外でかなり回復した２人を交えて４人で食事している時には、現にそんな状況も・・・。ザザ・ウルシャゼ監督による本作は、２０１５年のアカデミー賞とゴールデングローブ賞の外国語映画賞にノミネートされていることからわかるとおり、そこらあたりの駆け引きと人間模様の展開が興味深く、見どころいっぱいだ。

■□■こっちの兵隊、あっちの兵隊がやってくると・・・■□■

そんな序盤の展開の後、中盤ではアブハジアの義勇軍（？）の一隊がイヴォの家を訪れてくるシーンが登場する。ここではアハメドは仲間だから問題ないが、ニカはジョージア兵だということがバレたらやばい。そこで、ニカは頭部に傷を受けたため口がきけないことにしておこうというイヴォのアイデアに沿ったストーリーが展開される。こんな素人によるにわか芝居に見事に騙されるとは意外だが、そもそもドイツ人とフランス人がしゃべらなければ区別がつかないのと同じように、ここでもしゃべらなければオセアニア人かチ

ェチェン人かグルジア人かの区別は全然つかないのだろう。そんなストーリー展開は厳しい戦争局面の中で少しユーモラスな面を見せているが、続いて今度は逆にジョージアの兵士の一隊がやって来てアハメドに対して疑いを持ち、「チェチェン語を喋ってみろ！」と言い始めると、たちまち局面は緊迫化してくることに。

本作導入部で、兵士であるアハメドが民間人であるイヴォの家を訪れ、「何か食うものはないか？ケチるんじゃないぞ。」「写真の女は娘か？」等と質問してきた時は、ひょっとしてこれはヤバイ事態に・・・？と心配したが、出ていく時に「みんな俺たちみたいな善人じゃないぞ！」と言っていたとおり、アハメドは善人だった。しかし、今スクリーン上に見るジョージア兵たちは善人ではなく、疑いの塊のような兵士で、反抗的な態度が目立つアハメドに対し「撃ってしまえ！」と命令したから、さあ大変・・・。

▪□■クライマックスの銃撃戦の結末は？■□▪

本作では、ここからのクライマックスへの展開が興味深いので、それに注目！家の外に出ていたアハメドに対してニカは家の中に隠れていたが、既に銃は準備していたから事態が事態になれば・・・。そう身構えていたところ、ジョージア兵たちの銃が一斉にアハメドに向けられ発射されようとしたから、さあニカは・・・？

ここから始まるクライマックスはあなた自身の目でしっかり見てもらいたいが、その結末は、まずマルゴスは流れ弾にあたって死亡。そして、ニカの働きによってジョージア兵たちをやっつけた（と思った）後、意外にもまだ息をしていたジョージア兵によってニカが撃たれニカも死亡。結局生き残ったのは、イヴォとアハメドの２人だけになってしまう。

戦争って何？ジョージア兵とアブハジア兵の違いって何？人間同士の信頼って何？本作の鑑賞を機にそんなことをあらためて考えてみたい。

２０１６（平成２８）年１０月２５日記